

日本でもジカウイルス感染症ワクチンの開発

◆武田薬品工業と阪大微生物病研究会がジカウイルス感染症ワクチンを開発

中南米から大流行が始まったジカウイルス感染は、感染地域を拡大し、東南アジアでも流行の兆しが見えている。そうした中、2016年9月には、日本の研究機関がかかわるジカウイルス感染症ワクチン開発のニュースが続いた。

一つは、武田薬品工業の米国子会社Takeda Vaccineが米国保健福祉省との間で交わしたジカウイルス感染症ワクチン開発に関する契約であり、米国のジカウイルス緊急対策の支援を受けたものである。もう一つは、阪大微生物病研究会のワクチン開発着手であり、日本医療研究開発機構の「新興・再興感染症に対する革新的医薬品等開発推進研究事業」の一環として行われるものである。

ジカウイルス感染症ワクチンの開発に関しては、16年7月にフランスの製薬会社サノフィも米国国防省のWalter Reed陸軍研究所との共同研究開発契約の締結を発表している。ジカウイルス感染迅速診断キットの研究開発に関する発表も相次いでおり、ジカウイルス対策をめぐる動きが活発化している。

◆同じフラビウイルス科のウイルスで成功例のあるワクチン開発

16年9月に発表された研究成果により、サルを用いた実験で、不活性化ウイルスワクチン、プラスミドDNAワクチン、アデノウイルス組み換えワクチンの3つの形態のワクチンのいずれもがジカウイルス感染を防ぐことが示され、ワクチンが作り易いウイルスと考えられる。また、同じフラビウイルス科に属するデングウイルスに対してはサノフィが、日本脳炎ウイルスに対しては阪大微生物病研究会などがワクチンを実用化している。

そうした背景からワクチン開発が成功する確率は高いと考えられるが、有効性が示され、臨床試験を経て、規制当局の承認を得るまでには時間を要する。ジカウイルス感染では顕著な症状が現れない場合も多く、知らぬ間に感染が広まる可能性もある。開発が順調に進み、新生児小頭症を引き起こすジカウイルスの妊婦への感染を防ぐ有効な手段として、ワクチンができるだけ早期に実用化されることが望まれる。

【戸潤一孔】